

博士(文学) 対馬康博

学位論文題名

A Cognitive Linguistic Study of Implicit Theme Resultative Constructions and Their Related Constructions

(主題非明示型結果構文とその関連構文に関する認知言語学的研究)

学位論文内容の要旨

本論文は、

- Our new washing powder washes whiter!
- These revolutionary brooms sweep cleaner than ever.

のような構文の統語的・意味的特徴を認知言語学の観点から明らかにしたものである。この構文において主語は典型的には道具であり、人がその道具を使ってモノに働きかけ、その結果としてモノが被る状態変化が動詞直後の whiter, cleaner などの二次述語で示される。このモノ、すなわち状態変化を被る主題が言語化されていないため、この構文は「主題非明示型結果構文」と名づけられる。本論文はこの構文の統語的・意味的特徴をインフォーマント、コーパス・データを用いて丹念に記述した後、この構文と「主題明示型結果構文」(例: John washed his hands clean.)および「中間構文」(例: This soap washes well.)との詳細な比較をし、認知言語学(特に認知文法、構文文法)の観点から主題非明示型結果構文を英語の構文ネットワークの中に位置づけることを目指したものである。

本論文の構成は以下の 7 章からなる。第 1 章では分析対象である主題非明示型結果構文を規定するとともに、以降の章で採用される方法論が紹介される。そして本論文の目的として、(i) 主題非明示型結果構文が他の構文からは完全に予測できない構文的特徴をもった独自の構文であることを示すこと、(ii) 主題非明示型結果構文と、主題明示型結果構文および中間構文との関係を明らかにすること、(iii) 主題非明示型結果構文が認知的な動機づけをもつこと、の 3 つが挙げられる。

第 2 章は主題非明示型結果構文に言及した先行研究として、Aarts (1995, 1997), Goldberg (2001, 2005a, b) と Kageyama (2002) が概観され、いずれも理論的な関心が先行し、この構文の構文的特徴が十分詳細に記述されていない点が指摘される。

第 3 章では本論文が依拠する認知言語学、特に認知文法と構文文法の枠組み・道具立てについて解説される。

第 4 章から第 6 章が本論文の主要部である。まず第 4 章では、先行研究ではほとんど明らかにされていない主題非明示型結果構文の構文的諸特徴、すなわち、この構文の主語、動詞(意味、時制、アスペクト、極性)、非明示主題、結果述語、使用域に関して、イン

フォーマントおよびコーパス・データに基づく調査による詳細な記述が展開される。より具体的には、主語は典型的には本質的特徴と複雑性を備えた道具であること、動詞は通例、習慣的現在時制をとり、アスペクト的には非限界的と解されること、非明示主題は非特定的に解釈されること、結果述語は形容詞の比較級、最上級のほか、前置詞句によっても担われるとともに、意味的には Washio (1997) のいう *weak resultatives* に概ね相当すること、使用域としては宣伝・広告によくみられることなどが論証される。さらにこうした諸特徴は単なる寄せ集めではなく、ゲシュタルト的に相互に関連しあったものであることが示され、主題非明示型結果構文は独自の形式と意味が結びついた構文であることが主張される。

第 5 章では、前章で示された主題非明示型結果構文の構文的諸特徴を、主題明示型結果構文と中間構文がどの程度共有するかが詳細に調べられ、概略、主題非明示型結果構文は結果に関する形式、意味を主題明示型結果構文と共有し、属性に関する意味、時制、アスペクトおよび使用域を中間構文と共有することが示される。これにより主題非明示型結果構文は、主題明示型結果構文および中間構文と一部構文的特徴を共有しながらも、これら関連構文から独立した構文であることが論じられる。

第 6 章では、カテゴリとしての主題非明示型結果構文の内部構造、さらに主題明示型結果構文および中間構文とのネットワークが論じられる。まず、第 4 章で検討された構文的特徴をすべて備えたものが主題非明示型結果構文のプロトタイプ（典型）であると主張された上で、それらの特徴を一部欠く非典型例が存在することが指摘される。このことから主題非明示型結果構文はプロトタイプを中心とし、特徴を一部欠く非典型例を周辺に配するプロトタイプ・カテゴリを成すことが主張される。また、コーパス・データを使った調査から、構文としての生産性は低いものの、〈道具主語 + wash + 形容詞比較級〉がもつとも高頻度に生起することが示される。最後に、主題非明示型結果構文は、主題明示型結果構文および中間構文のカテゴリから構文的特徴を部分的に継承した融合構文であり、主題非明示型結果構文を介して主題明示型結果構文と中間構文が結ばれ、構文ネットワークを構成することが主張される。

第 7 章は結論として本論文の成果が要約されるとともに、主題非明示型結果構文の歴史的発達など今後の研究の課題について述べられる。

学位論文審査の要旨

主査 準教授 野村益寛
副査 教授 高橋英光
副査 教授 佐藤知己

学位論文題名

A Cognitive Linguistic Study of Implicit Theme Resultative Constructions and Their Related Constructions

(主題非明示型結果構文とその関連構文に関する認知言語学的研究)

平成21年12月18日（金）文学研究科教授会の承認のもと、上記3名をもって本論文の審査委員会を発足し、以下のように計5回の審査をおこなった。

- ・ 第1回審査委員会（平成21年12月18日）
論文のコピーを配付し、審査方針について議論し、今後の審査日程を調整した。
- ・ 第2回審査委員会（平成22年1月28日）
論文内容について検討し、口頭試問に向けて問題点の整理をした。
- ・ 第3回審査委員会（平成22年2月4日）
口頭試問を実施し、問題点・疑問点について質疑応答をおこなった後、学位授与の可否を判定した。
- ・ 第4回審査委員会（平成22年2月10日）
審査結果報告書（案）の検討と確認をおこなった。
- ・ 第5回審査委員会（平成22年2月15日）
審査結果報告書の確定をおこなった。

以下に本論文の評価を述べる。

本論文は、存在こそ知られてはいたものの、詳細な記述はこれまでなされてこなかった主題非明示型結果構文をインフォーマントおよびコーパス・データを利用して初めて組織的に記述・説明したもので、その点をもってしてだけでも極めて大きな意義を有する。さらに、本論文は、単に先行研究のほとんどない言語現象を明らかにしたというだけでなく、次のような一般言語学的な意義をも有すると考えられる。第一に、主題非明示型結果構文の形式と意味が、主題明示型結果構文、中間構文、道具主語構文などから動機づけられていることから、構文という単位が言語体系の中でさまざまな動機づけを受けて成り立つて

いることを実証した点。第二に、主題非明示型結果構文は生起頻度・定着度が低い、萌芽的な構文ではあるが、主要な構文と同様に、プロトタイプを中心としたカテゴリを成すものであることを示すことによって、構文レベルでのプロトタイプ・カテゴリの遍在性を示唆した点。第三に、主題非明示型結果構文を主題明示型結果構文と中間構文の属性を一部継承した融合構文であると分析することにより、構文レベルでの「融合」(blending)のメカニズムの研究というテーマに対して貢献した点、である。さらなるデータの収集・分析に基づいて、この構文の歴史的発達や実際の文脈における機能などを探ることなどを今後の研究課題として期待したい。最後に、本論文の内容の一部はすでに日本認知言語学会、国際認知言語学会等の内外の学会で発表されており、高い評価を得たものであることを付記しておく。

以上の審査結果から本審査委員会は一致して、本論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであるとの結論に達した。